

審議会等議事概要

平成26年度 滝川市高等学校教育のあり方に関する検討市民会議 議事概要

日 時	平成26年9月30日（火曜日）午後6時00分～午後7時30分
開催場所	滝川市役所5階 庁議室
出席者	出席：田代委員長、居林副委員長、佐藤委員、春田委員、太田委員、富田委員、佐々井委員、柴田委員 欠席：沖本委員、水口委員、今野委員、尾崎委員、船奥委員、渋谷委員 堀田委員 オブザーバー：後藤校長、内海校長、松田校長 事務局等：館教育部長、小野指導参事、高田学校教育課長 中川学校教育課長補佐、鳩山新しい学校づくり推進室長、酒井係長
議 事	<p>1 開 会</p> <p>2 委員長挨拶 お忙しい中、この会議に関して、ご協力を頂いていることに感謝申し上げます。 本日は第2回目ですので、第1回目は説明を中心に進めて参りましたが、今回は、皆様からいろいろなご意見や考えを伺いたいので、よろしくお願ひしたい旨の挨拶があった。</p> <p>3 報告事項 (1) 公立高等学校配置計画（平成27年度～29年度）について ・事務局) 鳩山室長より「公立高等学校配置計画（平成27年度～29年度）の概要」を用いて説明を行った。 ※質疑等特になし</p> <p>4 協議事項 ・事務局) 鳩山室長より「滝川市高等学校教育のあり方に関する検討市民会議（第2回）資料」を用いて説明を行った。 ・委員長 空知北学区・滝川市において、中卒者が減少するという事について、ご意見を伺いたい。</p>

・委員

滝川市は高校が3つあり、近隣に農業高校等の高校もあるので、滝川に永住して良かったと思う。将来の高校入学の選択肢が減ってしまうのは、残念なことなので、今の状態を維持してもらい、3つの高校が間口を確保し合って、滝川の発展に繋がっていければいいと思う。もし、どうしても間口を減らさなければいけないのであれば、3校で話し合って協力して欲しいと思う。

・委員長

高校間の連携で、何か取組はあるか。

・オブザーバー

滝川市また新十津川も入れて、農業、工業、西高の商業、普通科の英語教育、滝高の進学、理数科の理科とそれぞれ特色を出している。そういう意味で滝川市という街、近隣を含めてバランスの良い学校配置という感じはする。

滝川は、それぞれの学校の特徴が活かされる地域なので、是非残して行きたい。それぞれの学校が色々な形で特徴を出しているので、間口減の問題は厳しいのかなと感じている。

・委員長

滝高はスーパーサイエンスハイスクール（S・S・H）、西高は英語教育を長きに渡り取組んでいる。工業高校は地域との連携として、授業の中に入って頂き、小中学生が技術を学ぶという取組を行っている。

今回オープンキャンパスを終えていかがだったか。

・オブザーバー

9月に体験入学会を行った。今回の9月13日の体験入学では、生徒が約250名、保護者引率の教員が約50名、全部で約300名弱が参加した。

内容は、SSHの取組の発表を行い、生徒もそれぞれ設定した13の授業に参加し、最後に感想を書いて貰った。

250名のうち、受験したいという生徒は190名、残りの90名は考え中というアンケート結果だった。保護者からは、地域の進学校としてもっと頑張ってもらいたいという声があった。それを受け止めて教育活動を行わなければと思う。

連携の話だが、西高で英語の教え方を勉強させて貰ったり、各高校で授業公開もしているのを見学することを行っている。

また、各学校でのボランティア活動等では、各高校の生徒と一緒に活動したり、いろいろ刺激を受けながら、生活できる環境ではないかと思う。

・オブザーバー

体験入学は8月に実施し、生徒の参加が418名、保護者が約100名、引率の先生が10数名だった。

連携については、滝川市内の3校は非常に良く連携が出来ていると思う。それぞれ独立した学校のため、協力といっても限られた範囲になるが、1つは教員間の研修的なことでの協力で、かなり積極的に行えていると思う。生徒指導に関わって情報交換や一緒に指導に取り組むことも、かなりのレベルで出来ている。

また、部活動等でも色々な交流や支援があり、他の地域に比べて熱心な地域だと思う。

・オブザーバー

体験入学については、10月4日を予定している。現在のところ、80名の中学生、保護者・引率の先生は、それぞれ10名程度を予定している。

内容については、実習に関わる物作りの実習テーマを、約12～13用意し、生徒が希望する工作やプログラムのテーマについて実習する。最後に、部活の見学を計画している。

・委員長

このままの推移で行けば間口が広がる、選択肢が広がるという状況にあるが、この点について意見や問題等があればご指摘願いたい。

・委員

保護者の立場から見ると、進学であれば普通科、そうでなければ学力で入れるところを探すのではないかと思う。子どもが少なくなり、間口が広がるのは良いが、学力にも差がありこの先間口が狭くなると、どこへ行くのかと思う。少し学力の低いところから間口が無くなって行くと、他の学力が良いところも、だんだんと学力が下がって行くのかと思う。

滝川は先程言われた通り、商業科もあり工業科もあり農業科も近くにあり、選択肢はあると思うが、子どもがそれをやりたいからその学校へ行くのではなく、学力的に入れるところで選択していると思う。管内ではなく札幌や旭川に出て、上を目指している子もいる。親の立場から言うと、正直交通費がかからない方が助かるので、近郊であれば良いと思う。

正直、間口がどうのというのは分からないが、子どもが減ることももちろんだが、この先学校が減って行くのも困る。

・委員長

子どもたちの進路への動機、現実問題として考えを頂いたが、生徒の動機や考え方が変化しているのか、していないのかという部分について、お話を伺いたい。

・委員

3年生になればもちろん受験となって行くが、受験対策と言って1年生から勉強とは言っていない。今はキャリア教育ということで、自分の生き方・進路について小学校のうちから考え、1年生から仕事や学ぶということについて考え、2年生では職場体験を行い、実際に職場の中に入って働くことについて考えるということを行っているが、受験対策と言うほどシビアには言っていない。

ただ現実問題として、3年生は、2学期の中でどこを受けるのか決めて行かなければいけないので、しっかりとした目的意識を持って取組める生徒と、どこに行きたいというよりどこなら入れるという選択になって行く生徒もいるのが事実。

傾向として、子どもも保護者も地元指向が強いので、出来るだけ地元の学校に通わせたい、それは滝川あるいは滝川周辺で、色々な選択が出来るということが大きいと思う。

またもう1つは、通学の経済的な負担、時間的な負担をかけたくないかせせたくないということで、なんとか地元でという声が多いと思う。

本当は、早く自分の進路を見据えて行きたい高校を考え、勉強させたいと思っているが、部活動も盛んで、勉強だけではなく友人との遊び等を求めているのも事実。学力テスト結果も少しずつ滝川の学力も上がって来てはいるが、まだ全道平均・全国平均よりは遅れるので、もっと自分の求めているところへ行けるような進路指導をして行かなければならないと思っている。

ただ、滝川市内の高校がほぼ定員を満たしている中で、間口が減って行くことによって滝川の中学生在外に出ざるを得ないというのが現実なのかなと、そうならないように学力を高めて行かなければならないが、市内の高校の間口が減ることによって外に行かざるを得ないということは、なかなか保護者や生徒に説明しづらいところなので、中学校としてはこれだけのニーズがある中で、何とか地元の枠を維持して貰いたいなと率直に思っている。

・委員

中学校は、進路指導と受験指導という狭間で非常に悩む部分がある。進路指導というと、やはり広い意味で10年先、20年先、30年先に自分がどういう生活を送りたいのか、どういう人生を送りたいのか、ということを中心にやるので、ただ単に自分の総合学力テストABCの平均点でここなら入れるのではなくて、将来自分は何をしたいのかに志を持たせるような指導、2年生ではキャリア教育の視点で、職場体験等を交えながら行っている。

ただ実際問題、2学期になるとどうしても総合学力テストABCの結果で、最終的にはどこに入れるのか、ここに入る為にはもう少し頑張るか、という傾向になって来る。

滝川の子どもたちは恵まれていると思う。前任地では地元で高校がなく、駅から列車で別方面に別れてしまう。それこそ自分が将来何になりたいより

も、高校生活で部活を楽しみたい、色々な友達との交流を楽しみたい等、高校生活に夢を持ち、たくさん生徒のいる学校や部活数の多い学校へ行きたいと選ぶ生徒もいる。保護者側も、滝高に対するブランド感、西高の文武両道の校風と評価を持って滝川市を見ているので、大半の生徒が滝川に出るのを望んでいる。

ただ、何点採ったら入れるのではなく、やはり自分がこんな風にしてどんな人生を送りたいのか、ということに力を入れて進路指導して行きたいと考えている。

・委員

まず1点目、教育というのは街づくり、街の存続に関わって来るのかと思う。

滝川の生徒は恵まれており、4万人規模でこんなに高校が選べる、引き出しの多い街はないと思うので、高校を維持して欲しいと思う。定員が足りないからすぐ間口減というのは、個人としては反対である。

2点目は、厳密に進路指導というのは高校だけではないので、将来を見据えて目的意識を持った指導をしていかなければならないと思う。

それからもう1点は、生徒のニーズと保護者のニーズが変わって来ているように思う。10年前は、良い大学に進学するという目的もあったと思うが、今は欲張って、大学も就職も部活もといったニーズが強くなっていると思う。

・委員

滝川だけでなく深川方面も通いやすい地域なので、色々選択の幅が多く、その中で自分の将来を見据えて高校選択する子もいれば、点数で決める子もいるのが現状である。

ただ、生徒数が減少しているのも現状で、中学校に入ってから自分の進路をとっていくが、生徒数が少ない中で、競争を意識するのはなかなか難しい。自分の進路に向けての学習が思うように出来ないこと、選択の幅は広いが、逆に競争原理が働きにくく、勉強を頑張ればいいと思うこともあるのが現状である。

・委員長

西高・工業は特に就職の子どもたちも多いと数字でも出ているが、そうすると企業側・受入側産業界からということになるが、感想や高校への要望等伺いたい。

・委員

滝川は製造業が非常に少ない街で、そういった意味で高校生の就職の受け皿としては、産業基盤ができていないのが実状である。市役所や福祉関係の

人達の就職はそれなりに継続的にあるが、製造業がないというのが大きな問題である。

空知の中でも滝川というのは、教育の集積をずっとして来た街だと思う。教育の街として、外から子どもたちが集まる魅力が凄くあるというのは、最近の話ではなく10年も20年も30年も培ってきた力だと思う。活力という面からすると、やはり高校生の若い力が集約しているというのが大きいと思う。地域エゴになると思うが、間口が減る学校が減るということは、地域にとっても大きなダメージになるので、極力ない方がいいと思う。

・委員長

就職問題については、高校だけではなくて大学生も大変多くお世話になっている部分で、いかに大学の中で資質向上・即戦力を育てるかが課題となっている。また地域との連携ということも昔の大学と様変わりしている。特に大学は、2018年問題というのが全国の大学で直面するという現状がある。大学は全国区で集めることが出来るが、短期大学は約90%が、道外からで道内が少ない状況である。道内の短期大学も本当に生き残れるかどうかという問題に直面している中で、大学でも色々な特色づくりを行っている。

滝川は普通科も商業科も工業科もあり、高校の引き出しが多いということだが、千歳・恵庭・石狩市等が高校は2校しかない、配置の現実という部分もあると思う。

・事務局

間口の問題が出たが、滝川の中学校卒業生数は、300人程度、現在の間口は600人と倍もある。倍あるということは皆入れるという状況になっている。

もう1つは、市内の3校は全部公立高校だということ。ここしばらく道教委から、滝川の市立高校の間口を検討して欲しいと言われ続けてきたが、拒否して来た。しかしながら、滝川が拒否すると他の地域で影響が出てくる。例えば高校が無くなる街も出てくる。道教委も数字だけではなく、地域の実情やバランスも踏まえて、公立高校は必要であり、入る生徒が少なくなったからと言って、高校を無くすということには直ぐにはいかない。そういったことも考えて行かないといけない。

なぜなら教育委員会として、市立高校の西高という部分もあるが、決して滝川だけ良ければいいということではない。

また、滝川は恵まれた環境だと市教委も思っている。3校あって近隣に農業科があり、更に普通科高校もあると、非常に恵まれた環境にあるので、市教委として、そういったものから考えて行かないといけないと思う。

それから西高においては、オープンスクールがあり、遠くは稚内や宗谷管内から、野球等の西高の魅力の中でいろいろな地域から来ている。

新聞局のアンケートが興味深く、1つは進路選択の幅がある。要は自分の

将来に向かってこういう大学に行きたい人もいれば、そうではなく、高校入ってから進学なのか就職なのか考える人もいる。そういった中で西高は、普通科とビジネス科があり進路の選択の幅が多いところが魅力と書いている中学生が多かった。

それともう1つは、部活で頑張りたいという人が多かったということ。

それぞれの学校の特色という部分を見ながら考えなければいけないのだが、結論的には周りの高校は、もっと大変な状況だということ。

・委員長

現実問題としてそういう問題もあるということだが、そこで西高が定員を満たしている、極端な話で言えば北学区では滝川が一人勝ちであり、滝川では西高が一人勝ちになると思われるが、これから学区全体を見た時、中学卒業生が減るという中で、これに対応する考えがあれば伺いたい。

・オブザーバー

今までの論議を踏まえて、本校は確かに潜在的な志望数は増えている。管内の中学校卒業生は減少傾向にあるが、逆行する形で増えている。今回の体験入学でも、北学区15の市や町全ての中学校から参加があった。また418名の参加の内、約20名が学区外であった。

滝川市内が恵まれているというお話だが、滝川市内の中学生は、数年前に比べると本校へ入りづらくなっている。今年本校へは112名が入学しているが、これは定員280名のうち、40%。60%は市外から、市外の中学校卒業生の占有率が年々増えている。

なぜ本校に志望が集まったかということだが、最大の要因は、本校が北学区で1校しかない7間口校だからである。このサイズメリットが非常に重要だと思う。

本校卒業後の進路だが、普通科は進学、ビジネス科は、全道の商業高校・商業科設置高校においては特異な状況だが、卒業後の進路で進学が7割、就職が3割である。普通科は進学、ビジネス科は就職、と一般的に捉えられているが、ビジネス科は明らかに進学校化している。近隣の高校よりも本校のビジネス科の進学者の方が多い。進学者の中で、商業高校や商業科の卒業生は、専門学校に行く割合が非常に多く、大学は少数となっているが、本校の場合は今春の卒業生でいくと、大学進学者の方が専門学校進学者より多い。ビジネス科であっても入学後、大学進学も選択でき、専門学校そして就職と選べるのが、強みになっている。これもサイズメリットそして学科の品揃え・豊富さというところが強みになっている。

道教委の指針では、4間口以上が望ましい高校教育を行う上で必要だと示されているが、本校の場合は7間口あることから、中心力を増して来ていると言える。地域の中学校卒業生を考えて間口を次々減らして行けば、空知北学区には、大規模校どころか、中規模校もなくなり、小規模校だけとなる。

そうなると高校教育を行って行くには、相当支障が出て来るのではないかと思う。

市外からも生徒は、入って来ている。その理由として、大学に進学する選択肢が滝川高校か滝川西高校になっている、そして部活もやりたいという生徒が本校へ来るということで、全域から集まっている状況。これは本市において高校を有することの経済効果、それから長い目で見れば少子化対策に、大きな力になっていると思う。市・町の自治体の視点で考えると、滝川市だけ一人勝ちでいいのかという問題になるかと思うが、空知北学区でいかに高校教育の質を維持するかという観点でいけば、ある意味滝川に集積して、北学区の高校教育は滝川市が担うという観点で考えることも必要かと思う。あと工業高校については小規模校であっても地域の教育ニーズに答えるという点で、道教委も扱っている。このような観点で考えることも必要かと思う。

・委員長

今、理科離れということで、滝高理数科の定員割れについて、理科離れが進んでいるから学生が来ないのかということを知りたい。

・オブザーバー

理科離れが進んでいるのか進んでいないのかということについては、結論はすぐには出ない。

全道的に見ると、理数科のある学校は5校、平成18年に道教委の高校づくり推進室で、英語科と理数科はこれだけ必要なのか、単位制に切り替えて、対応出来るのではないかという議論があった。理数科については、現行の高校で言うと、平成14年から始まったS・S・Hの指定を受けて、子どもたちを伸ばしていくのだ、というようなスローガンもあったようだ。平成21年からS・S・Hの指定を受けた室蘭栄の理数科は、去年の平成25年度で5年間の指定が終わり、6年目の今年も継続指定が受けられなかった。釧路湖陵の理数科は、今年3年目で理数科というよりも特進学級のような傾向が1番強い。旭川西は、今年が4年目か5年目だと聞いており、札幌啓成と共に北海道のS・S・Hの拠点校の指定を受け、頑張っている。そして最後に滝高が去年指定を受け、道内では、全部で5校がS・S・Hを行っている。その中でも生徒は非常に良く伸びているが、道教委はとにかく進学実績を求め、理数教育というよりは、東大に何人入れた、北大に何人入れた、というような実績を求めて来る。指針を見ると平成30年～35年をめどに、理数科と英語科をどうするという議論が高校づくり推進室ではされているようだが、滝川高校の強みはやはり理数科があること。理数科と普通科で切磋琢磨しながらやっていることだと思う。S・S・Hの指定を貰うことによって、本校に志を持って集まってくる生徒は、切磋琢磨が出来ているという感じがしている。

今、2年生が少ないが、なぜ理数科が人数少なくなったのかというと、ど

んな活動をしてどんな出口があるのか、という部分のPR不足があると思う。

また、先日全国の理数科の会議があり、その時に話題になったのは、全国の理数科は理系ではないということ。文系でも理数教育が必要で、例えば西日本では、弁護士になりたい、経営や経済を勉強したいという子どもたちが、理数科に集まり、理科の勉強をして志を遂げる為の大学に進んでいる。理数科は理科や数学が純粋に好きだという生徒も、自分の将来のことを考えて広範囲に知識を吸収する為にという生徒もいる。文科省も今S・S・Hではなくスーパー・グローバル・ハイスクール（S・G・H）に切替わって来ているので、理数科はその波を受けて英語教育を行い、その中で国際的に通用する生徒を育てなさいとなっている。滝川は国際交流の盛んな街なので、国際交流の中で生徒が、英語力をつけながら伸びている状況がある。

理数科離れが進んでいる、進んでいないということではなく、国際人を育てる、またグローバル社会の中で、滝川市内に住んでいる子どもたちも、英語が必要になって来る。そういう意味では、本校の理数科も存在意味があるのかと思う。

本校には定時制もあり、雨竜高等養護学校に色々助けて貰い、活動を行っている。

何を言いたいのかというと、多様性も大事だということ。地域という定義をどこにおくのか。空知北学区、滝川を地域としてどう考えるのか、その中でどう中学生や小学生が成長して行けるのか、ということを考えなければいけない。平成30年のみならず、その先の平成33年、35年まで考えた時に、どのような順番で折り合いをつけていくのか、という話もして行かないといけないと思う。

・委員長

資料1～3までに基づいて、中学卒業者の危機的な減少が確認できたかと思う。それをふまえ、各委員の皆様からご意見を頂いた。これらを含め、第三回について、減少に対する対策や、詳しく説明いただいた高校のあり方等について協議を頂ければと思う。今は滝川市という形で討議を行っているが、空知北学区という学区で考えて行くと、滝川市が主導しながら進めていかなければならないであろうと考えている。また、新聞でも話題になっているが、自治体がなくなるということも辛いもの。そうなればおのずと高校だけではなく、小学校、中学校、高校と将来的には公の場で討議して、各市町村単位ではなく、学区ごとで協議しなければいけない時代が来るのかと思う。それほど、児童生徒の減少は危機的な状況にあると思われる。ただその中で、子どもたちに選択の幅と質の確保ということを、良き遺産として残していかなければならない部分だと思うので、第三回以降の討議においても貴重な意見そして忌憚な意見を伺いたい。

	<p>5 その他</p> <p>・事務局</p> <p>鳩山室長より、第三回の滝川市高等学校教育のあり方に関する検討市民会議の開催日についてと、工業高校の生徒による爪楊枝を使った点描画の展示についての説明を行った。</p> <p>6 閉会</p>
<p>会議資料</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○「公立高等学校配置計画（平成27年度～29年度）の概要」 ○「空知北学区中学校卒業生数の推計」 ○「空知北学区高校学科別入学者数の推移」 ○「滝川市内3高校卒業生の進路状況」